
声

ゆうき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声

【Nコード】

N9338I

【作者名】

ゆつき

【あらすじ】

声が出ない少女「櫻井みき」

ある病気で入院している「相葉はる」

その二人の運命。

一週間と言う短い時間で。

はるとの出会い。

私の声をうばったのは誰？

神様……？

声をうばったら私……

生きれないよ。

私は『櫻井みき』

小学校の頃は声があった。

今は、「みき」って呼ばれても返せないし、
このごろは呼ばれない。

笑い声は出せないけど涙は出せる。

声が出るって『普通』だと思ってたけど『普通』じゃないんだよね。
彼氏もいたけどとうぜん別れたし、生きる希望が見つからない。

そんな中私が声の事で入院しているある日ある男の子と一緒に病室
になった。

ナースコールの近くにある名前を見ると『相葉はる』って書いて
あった。

病名は……『白血病』だった。

私は頭の中が真っ白になった。

『はる』が部屋に入ってきた。

抗癌剤の副作用で髪の毛が落ち帽子をしていた。
はるのお母さんと一緒に入ってきた。

お母さん

「これからはるをよろしくね。『はる』って呼んであげてね
私が声が出ないって知らなかった。

それから30分……

看護師がやってきた。

二人いつぺんに診察だった。

私は明るい感じで私の話は続いた。

医者

「あと一週間で退院できるよ」

はるの話は・・・

医者

「これから、もっと強い抗癌剤を打つよ。」

はる

「わかったよ・・・もう我慢するしか無いって事でよな！いつまで続くん！」

医者

「まだ手術できる状態じゃないんだ。ごめんね・・・」

「わかったよ！もういいから出てけよ！」

私はすぐさまイヤホンをして音楽を聴いた。

そしたらはるが喋りかけてきた。

「なんでしゃべれへんの？さっきはビツクリさしてごめんな！」

音楽で全然聴こえなかった。

でも目が合ったからイヤホンをはずした。

もう一回はるは同じ事を言ってくれた。

私は紙に書いて答えた。『』（紙に書いている内容。）

みき

『声が出ないの。』

はる

「ゴメン・・・聞いて・・・」

みき

『気にしなくていいよ！』

はる

「名前聞いてもいい？」

みき

『櫻井みき』『みき』って呼んでくれたら嬉しい』
はる

「ほんじゃあ『みき』って呼ぶな！」

それから二人はずっと声と紙でずっと語っていた。

次の日

はるの前に女の子がいた。

私は邪魔にならないように昨日と同じようにイヤホンをした。
そしたらはるが私の事を紹介してくれた。

はる

「俺と一緒に病室のみきでこっちは元カノの『二宮さくら』『やねん
！』」

さくら

「よろしくです」

二人はお似合いだった。

私は何故か胸が初めて痛くなった。

手話。

手話。

それは手で相手に自分の思いを伝える。

覚えるのは大変。

でも自分の思いを伝えれるからいい。

お母さんが部屋に入って来た。

私はお母さんと手話で話した。

声が出なくなってから急いで覚えたのだ。

はる

「すごい・・・僕も覚えようかな〜！」

母

「ほんじゃあ手話の本貸してあげるよ」

みき（『は手話』）

『貸すのはいいけど、お医者さんからあと一週間で退院だって言われへんだよ・・・！』

母

『そうなの・・・でも貸してあげましょうよ！こんなキラキラした目で見られたらダメだわ・・・！』

みき

『わかった』

はる

「スゲー！何話してたんですか？」

母

「なんでもないけど・・・ちよつとしたケンカ」

はる

「笑」

それから母がいなくなってから二人になった。

はる

「いつまでここにいるん？」

みき

「わかんない」

何故か私は嘘をついてしまった。

何で嘘をついたんだろう。

そればかり考えていた。

次の日

私はお母さんが

母

「暗い顔してるで……！」

みき（手話）

『大丈夫』

はるがトイレから戻ってきた。

お母さんはすりぬくように部屋から出ていった。

はる

「オレどうしよう……めっちゃ胸痛い……」

みき（紙）

『大丈夫？』

はる

「さっきトイレ行ってから診察してもらったらなんも異状なくて……」

「・」

みき

「？」

はる

「もしかして俺……」

言おうとした瞬間母がタイミングよく母が入ってきた。

母

「どうしたの？はるくん顔が固まってるわよ？」

はる

「なんでもないです！」

母

「そう？」

みき

「うなずく」

母

「ハイ！コレ！」

母ははるに手話の本をプレゼントした。

はるはキラキラした目で

はる

「ありがとうございます！」

母

「喜んでくれるなんて嬉しいわ〜！」

母とはるが話していたら私の診察の時間になった。

医者

「回復が早くなっていますよ。もう少しリハビリしたら声出せるか

もしれません。」

母

「よかったわね！」

みき

「うなずく」

はる

「良かったじゃん！」

ちょっと遅れてはるの診察だった。

母は用事を思い出してたのか病室から出て行った。

医者

「今日から違う抗癌剤を打つよ。」

はる

「うん・・・母さんは？」

医者

「仕事でこれないって・・・。」

はる

「・・・」

そのまま医者は何も言わず部屋から出て行った。

お母さんは用事が終わってから私に

母

「もう帰るわね！」

って言って帰ってしまった。

私は手話の事についていっぱい語った。

みき（紙）

『手話って覚えるの大変だったけど後からすごく役にたつよ。私と同じく声が出なくて手話で喋ったりそれを驚く人を見ると楽しくなる。だって「すごいな」とか思われたりするから。』

はる
「そうなんだ！いつかみきと紙無しで喋る時が来るかな？」
みき

『はるが早く覚えたらね！』

私は心が痛かった。

一週間で退院する私にこんなに必死に頑張って手話を覚えてくれるはるが嬉しかった。

優しいはる。

それから私とはる二人だけになった。
はるがビックリする事を聞いてきた。

はる

「聞いたら悪いと思うねんけど・・・なんで声出んようになってもたん?」

みき(紙)

『小学校の頃は普通に声出せてたけど、下校中に交通事故にあつてまた声出せてないねん・・・足とか手も前まで骨折してたけど今は治ってるよ。でも首だけ強く打ったから、声が出ないの。』

「そうだったんだ・・・大変だったよね・・・」

みき

『だから今まで、学校行けないって言うか・・・学校行けなくなっちゃった・・・』

はる

「・・・」

みき

『さつきお母さんが来る前に言ってた事どうしたの?』

はる

「またあとで話すよ!今から手話の勉強してみきみたいに」サラサラ」
「ってしたいから!」

みき(手話)

『頑張つて!』

はる

「?」

みき(紙)

『頑張って!』ってやったの!』
はる

「わかんないよ・・・!」

みき

『笑』

それからみきはもう一回「頑張って!」って手話をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9338i/>

声

2010年12月10日17時30分発行